

平成31年1月5日発行(毎月5日1回発行)

第59巻1月号(通巻714号)

風土



嫁が君ゐるにまかせて書屋かな

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

「嫁が君」は正月三が日の鼠を言います。鼠は食物を荒らす動物ですが、一方では大黒天の使いとされきました。地方によっては米や餅を「嫁が君」に供える所もあります。さてこの「書屋」は七畳小屋です。「ゐるにまかせて」ですから梁などを走り回っているのです。桂郎師の酒の肴のおこぼれを狙っているのかもしれない連翹ません。食べる・呑む・書くも一部屋の七畳小屋の正月風景です。

風邪籠り留守居のごとし箸茶碗

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

風邪で寝込んでいる桂郎師は、我が「七畳小屋」を朦朧とした意識で眺めています。薄蒲団にくるまりながら炬燵に伏せられたままの「箸茶碗」を見てみると、他所の家で留守番をしているように感じています。この「箸茶碗」はひよつとすると何も食はず、二三日伏せられたままかもしれません。

降る雪の音のとどきて鯉眠る

(句集『幻』より平成七年作)

自註『神威器集』に抛りますと、器師の行きつけの喫茶店の庭には大きな鯉が飼われていました。普通鯉は一メートルぐらいの水深が必要ですが、この池は浅く、鯉が眠ったように動かないでいます。器師は、これほど浅いなら雪の音が届いているにちがいないと感じたのです。鯉に感情移入して得られた作品です。

雪掘つて火の匂ひなす露の臺

(句集『幻』より平成七年作)

露は、春に先がけて苞に包まれた花芽を土の中から覗かせます。まわりが枯れ色の野原にぼつりと萌黄色の「露の臺」を見つけると春の訪れを感じ心が弾みます。この句は「雪掘つて」ですから、雪国の露の臺でしょう。雪景色の中から萌黄色の花芽を採り出した喜びはひとしおです。器師は、雪の下で育まれるその生命力を「火の匂ひなす」と称賛しています。「火の匂ひなす」の大胆な比喻により、みずみずしい「露の臺」を目の当たりにします。

何やかや
南うみを

何やかや隣へ詫びに野分晴

一人蹴りみんな蹴りだす煙草

檻畏の中まで花野つづきをり

誰そ彼の芒に首を撫でらるる

花野過ぎしばらく揺れのおさまらず

コンビニの灯に刈田ねむれざる

鴟に贅蛙の股のまだ白く

豆摘むといふより媪むしり取る

ひよどりの鳴くたび蓮の破れ深む

三島にて鍛練会 三句

滔々と澄めるを富士の水といふ

せせらぎに食ぶ湧水の新豆腐

師のこゑを聞かばや十月ざくら咲く



竹間集

同人作品



小鳥来る

土井 三乙

林檎二つに割つて津軽の生まれとふ
初恋の話におよび夜長妻
鶏頭や時には力抜くことも
小鳥来る師の坪庭の今いかに
秋深む城址へ橋を渡るたび
丹頂の鋭声湿原霧籠めに
文化の日いままも台地に猷棲み

秋深む

林 いづみ

七五三頼朝姿の子が走る
綿虫に逢ひ得し三島大明神
新米の美味しうなぎも又うまし
秋蝶の来ませり先師を呼びをらば
灯笼に剥落の鏝秋深む
にび色の銀箔づくしの襖かな
心経橋殿橋や鴨来る

鴟日和

小林 共代

神無月茶畑の富士窈窕と
神楽殿へかかる梯子や木の実降る
本殿の乳鉾艶もつ鴟日和
風を呼ぶ「明史」の吹きし瓢の笛
湧水の底まで澄みて風収む
暮の秋三島小路の奥ふかし
どの部屋も鍵の掛からず十三夜

青北風

中根 美保

青北風の夕富士を吹き残したり
店奥に光あつめて錠前屋
迷ふたび富士振り返り秋うらら
太りては疵たのもしき椿の実
倒れ木のままのベンチに秋惜しむ
秋冷の走り根が抱く三島石
初鴨に流れ勢へり町の川

小鳥来る

間島あきら

雲淡くひかる無月のありどころ
行く水の三島に秋の声を聴く
鬼の子揺るる八百年の木々
茶の花を門に「小唄を教えます」
木の実打つ水や白瀧観音堂
小鳥来る治に靖・信まじしの碑
つるべつ子のぎつたんばつこん色鳥来

三 島

内藤 静

岩ごとに波しぶきけり鳥渡る
溶岩に生ふ色変へぬ松として
襖絵の箔しろじろと暮の秋
蹠のあそぶ抗ふ秋の水
澄む水の影水底をひた走る
あをぞらにその音聞かばや棟の実
ひと声を吠え神鹿となりおほす

凍 蝶

宮川みね子

冬晴るる健やかかなりし仔犬抱き
この世なる空の青さや柿たわわ
ひとり身にひそむ狂気や十月逝く
冬に入る俳句教室四十の瞳
日のおたる二階の句座や十二月
襟足にふつと風吹く小鳥来る
凍蝶や夫逝きてより二十七年

山河集

同人作品



南うみを選

袴着の頼朝風や一の宮
落合絹代

神鈴を鳴らす色なき風の中
伏流の湧き出づ観音堂の秋
富士ははや青墨色に秋の暮

楽寿館

冷まじや溶岩の上の廊傾ぎ

アルパカのすくと立つ丘秋高し
中嶋陽子

街中に清水湧く音鳥渡る
薄紅の麩菓子突つ立つ秋うらら
菊花展小菊は鳥の翼にし
十枚の吾子の恋文林檎むく

天高ししかと残り卒寿の齒
十三夜よい葬式だつたと母
谷田明日香

鴨来るきのふとちがふ今朝の河
霜の夜や使ひこなせぬ父の筆
はぐれ鴨湖の光にとけこんで

上辻蒼人

晩稲刈る動きの早き雲を見て
蟪蛄に野の色絡み付きにけり
壬申の阿騎野は霧を深めけり
高稲架に夕日を集め阿騎野かな
月昇る山河を黒く仕上げつつ

森高さよこ

をちこちに躍る湧き水小鳥来る
山茶花や富士の湧水町に添ふ
湧水の道祖神へと秋の蝶
せせらぎの中に数珠玉風に鳴る
水澄むや翡翠は色残し飛ぶ

混みて静か

落合絹代

渴筆の墨涸れゆく淑気かな
伝書鳩放つ一戸や初山河
大足の靴ばかりなる二日かな
ぜんざいの鍋ごと届く女正月
弾むもの立春と書くペンの先
まんさくの花のひらがな遊びとも
五山の格にほぐるる牡丹の芽
ひらひらと花ひらひらと手話の指



風船の影追ひつけぬ高さかな
夕凧や渚に流れイエスタデー
凸凹のビルに触れゆく夏の虫
鯉節の八木長に閉づ白日傘
師神威器先生の御霊瞬きかへす星月夜
師神威器先生を偲ぶ会の遺品ひとつひとつに秋の声
秋の灯に影生む子規の手形かな
蒼天に梅檀の実のゆたけしや
樹から樹へ竹へ夕日のからすうり
湧き出しか今綿虫のど真ん中
枳目出る夫の代筆神の留守
仏像展混みて静かや小六月

豆の花

谷田明日香

光るとは生きることなり飛ぶ蛍
鶏のふり回しをる大蚯蚓
集ひきては風起こしゆく赤とんぼ
椿の実割れて一気に杜は闇
豆鮎の頭ざくざく切り落とす
薪割の鉋置きしまま雪蛍
萩群の騒々しきまでに枯るる
大空へ直ぐなるものを冬芽てふ



底冷えを蹄の音のひびき来る
餅搗きの男より湯気立ちのぼる
寒鯉の眼動いたかもしれぬ
肩触れて福笹の鯛踊り出す
大寒を唇紅き少年来
老漁夫の揺れしなやかに牡蠣筏
来る波を慣らしては刈る若芽かな
いつせいに海へみひらく豆の花
古りたるを崩し新たな花筏
まつさらな朝の代田の明るさよ
朝日子はいつも生れたて沙羅の花
青芒風に切つ先研いでをり

風土独語／南 うみを



霜の夜や使ひこなせぬ父の筆

谷田明日香

一連の作品から亡き父の遺品であることが解ります。書をよくした「父の筆」を握ることで、想い起しているのです。冷えびえと張りつめた「霜の夜」が作者の心情を伝えていきます。

草虱 東京 神戸 往復す

三野 康子

「草虱」は動物の毛や人間の衣服についてその種を遠くに運んでもらいます。この「草虱」は何と東京神戸を往復しました。「往復す」と「草虱」が主人公になっているのが可笑しくもあります。

蠅螂に野の色絡み付きにけり

上辻 蒼人

枯れつつある「蠅螂」を、作者は「野の色絡み付き」と詠みましました。これで野も枯れつつあることを伝えていきます。野に親しんでいる作者ならではの措辞です。表現が巧みです。

糸絡む如くに果ててまんじゆさげ

仲 まゆみ

「まんじゆさげ」の盛りではなく、果てた姿を捉えました。たいていは花が終わり、糸の如く縮れてしまっているのに注意を向けません。しかしこれも「まんじゆさげ」の在り様なのです。

をちこちに躍る湧き水小鳥来る

森高さよこ

三島は柿田川湧水をはじめ、いたるところに「富士の水」が湧いています。「躍る湧き水」は作者の喜びと小鳥たちの喜びの表現です。躍動感にあふれた作品です。(以下略)

袴着の頼朝風や一の宮

落合 絹代

「一の宮」は三嶋大社のことで、源頼朝が源氏再興の挙兵旗揚げに成功したことで有名です。おりしも七五三の頃です。五歳の男子が頼朝風の袴姿であるのが凛々しく、土地柄が出ています。

湧水の新酒を提げて帰らむか

小原芙美子

これも三島での鍛錬会での作です。帰りの土産を考えた時、「水の三島」のお酒が浮かびました。「提げて帰らむか」に、作者のゆつたりとした気持ちと三島への挨拶の心が伝わってきます。

アルパカのすくと立つ丘秋高し

中嶋 陽子

作者は、三島の「菜寿園」の動物広場に飼われている「アルパカ」を句材としました。「すくと立つ丘」が故郷のアンデスを想い起させ、「秋高し」も高原の青空を想像させます。

文芸と科学のはざま冬の蠅

杉本葉王子

作者は薬の研究者としても活躍しています。「文芸と科学のはざま」での葛藤は、私たちには及ぶべくもない深いものがあるはずです。じつと動かぬ「冬の蠅」は自画像とも読めます。

風土集



南うみを選

秋色を抽んで富士の迫りくる

舞鶴

小原美美子

鶉高音神杉の秀を越えゆけり
湧水の新酒を提げて帰らむか

秋鱒は開きが宜し伊豆の国

手渡して回す抜き菜の浸し物

京都

杉本葉王子

断捨離はひとつの覚悟菊日和

御所の森臍石の上木の実置く

文芸と科学のはざま冬の蠅

ハズキルーペ灯火親しむ電子本

秋うらら鏡の中の老後かな

まよはずに一刀選ぶ秋刀魚かな

横浜

三觜 康子

宇宙とは母の胎内十三夜

藪虱のひそむズボンの折り返し

草風 東京 神戸 往復す

深呼吸して六根清浄秋澄みぬ

糸絡む如くに果ててまんじゆさげ

舞鶴

仲 まゆみ

爽やかに今朝の光を浴びてゐる

化粧水たつぷり使ひ十三夜

古民家のゐるりに座すやちちる虫

やはらかきもの見えてきし秋の風

吊るされて漆びかりの唐辛子

焼津

赤堀美恵子

オカリナのかすかに流れ金木犀

秋の日や築地市場はけふ限り

短冊にははの一句や銀木犀

雅なる便箋ならべ秋ともし

月光にすつくと立ちて黒き猫

焼津

川井さち子

夕陽染む親子の鯨秋の雲

冬隣「地獄の門」に息止めて

再会に街をステツプ秋夕焼

カーテンを透く月光に目覚めけり